

Gallery Talk 誌上 ギャラリートーク



“みんないっしょ”
© 2010 Hachette Livre © Gallimard Jeunesse

リサとガスパール日本語版刊行10周年記念 リサとガスパール&ペネロペ展

会期：2011年9月13日(火)～10月16日(日)

イヌのようにもウサギのようにも見えるけれど、どちらでもない不思議な二人、それがリサとガスパールです。2010年に「リサとガスパール」シリーズが日本語版刊行10周年を迎え、記念の絵本原画展を開催することとなりました。

最新刊を含む100点を超える原画のなかから私が好きな一点をご紹介します。白い体に赤いマフラーのリサ、黒い体に青いマフラーのガスパール。ガスパールのクラスに転校生としてやってきたリサは行動派でいろんなことにどんどん挑戦する女の子、ガスパールは優しくおっとりした男の子。いたずらや冒険をしにいろんな場所へ出かける二人の今回の目的地はなんと日本です。「リサとガスパールにほんへいく」では初めての日本旅行で好奇心旺盛な二人が巻き起こす冒険が色鮮やかに愛らしく描かれています。富士山、お寺、おはし、和食など見る

もの触れるものに驚いてばかりの二人。そんな二人が巻き起こすいたずらとは？二人が日本で活躍する様子があるように描かれているのは、ぜひ展示室でお楽しみください。

また、本展では「リサとガスパール」シリーズの作品に加え、2003年から始まった青いコアラの女の子ペネロペが活躍する「ペネロペ」シリーズの愛らしい原画の数々も展示します。リサとガスパール、ペネロペと一緒に絵本の世界への旅をお楽しみください。

[高松市美術館インターン 翠さやか]

セント・ピーターズバーグ市姉妹都市提携 50周年記念関連事業 第3期常設展・磯井如真の技と美

会期：2011年8月27日(土)～10月23日(日)

磯井如真は、1956年に国の重要無形文化財蒔髷保持者（人間国宝）に認定された香川が誇る漆芸家です。1883年愛媛県香川郡宮脇村（現：香川県高松市亀岡町）に生まれた如真は、凸版印刷の網点からヒントを得た「点彫り蒔髷」を創案し、従来では表現しえなかった色の濃淡や奥行きを表現を可能にしました。また、1909年に高松に戻り、製法が絶えて久しかった香川漆器を独自に研究を重ねて復興し、讃岐漆芸の近代化を確立したことから讃岐漆芸の中興の祖とも称されています。

如真は高松市の姉妹都市セント・ピーターズバーグ市とも交流があり、1961年に初の特別親善使節として当時のゴールドナー市長夫人の御両親マニャン夫妻が来高した際に磯井如真の工房を訪れたのをはじめ、同年には自身の作品を贈るなど、親子3代にわたって家族ぐるみの交流を持ちました。

今回の展示では、今年がセント・ピーターズバーグ市姉妹都市提携50周年となるのを記念し、同市と高松市の交流に縁のある磯井如真にスポットを当て、その初期から晩年に至る作品約30点をご紹介します。卓抜した意匠と造形力によって生み出された作品の数々をぜひご覧ください。また、もう一つの常設展示室では、セント・ピーターズ市に世界屈指のダリのコレクションを擁するダリ美術館があることから、ダリとシュルレアリスムの作品を展示しています。併せてお楽しみください。

[遠山直子]



磯井如真《彫漆蒔髷色紙髷 梅二八哥鳥》
1946年 高松市美術館蔵

時	記事	活動内容
4/1		しびのーと 23号発行
4/15～5/29	A★	「トリック・アートの世界展」ギャラリートーク (4月24日・5月1日をのぞく会期中日曜・祝日、各日午前・午後、開催回数のべ18回、参加者数のべ500名)★
5/15	B★	トリック・アートの世界展 ワークショップ「ポデゴン(鼻つき洋梨)をつくろう！」(講師：彫刻家・南正邦氏) アシスタント★
5/22	C★	「トリック・アートの世界展」 子どものアトリエ「アナモルフォーシス(ゆがみ絵)をつくろう！」(講師：彫刻家・南正邦氏) アシスタント★
6/4～7/10	D★	「三代徳田八十吉展」ギャラリートーク(会期中日曜・祝日、各日午前・午後、開催回数のべ12回、参加者数のべ200名)★
7/21		「小谷元彦展」内覧会・レセプション出席 ★♥
7/22～9/4	E★	「小谷元彦展」ギャラリートーク(会期中日曜・祝日、各日午前・午後、開催回数のべ14回、参加者数のべ280名)★♥
7/22～9/4		「小谷元彦展」映像作品《インフェルノ》鑑賞ガイド(会期中火～土、開催回数のべ33回)♥
8/3		子どものアトリエ「目に見えない時間や空気を形にしよう！」(講師：美術家・あきやましんご氏) アシスタント★
8/6	F★	「美術館の日」ふらっとアートアシスタント ★♥
8/10	G★	子どものアトリエ「イカの甲からイカしたアクセサリーを作ろう！」(講師：造形作家・小沼秀彦氏) アシスタント★
8/19・20	H★	「学生ボランティアcimi(シミー)による番外編アートで遊ぼう！」アシスタント♥
8/24		子どものアトリエ「みんなとちがう自分の手の地図を作ろう！」(講師：美術家・赤松きよ氏) アシスタント★

★ボランティアcivi(シヴィ)による活動 ♥学生ボランティアcimi(シミー)による活動

A 「トリック・アートの世界展」ギャラリートークを終えて

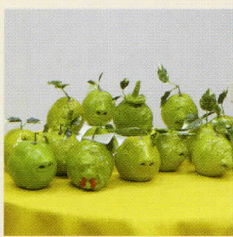
全国11会場を巡回し、各地で多くの入場者数を記録した「トリック・アートの世界展」。ここ高松市美術館でも、約2万6千人の方にご来場いただきました。出品作品の大半は高松市美術館の所蔵作品。これまでに「高松市美術館コレクション展」のタイトルで現代アートを紹介する展覧会がたびたび開催されてきましたが、これらの展覧会が入場者数的にいまいち振るわなかったことを考えると、今回の人気ぶりは驚きです。「トリック・アートの世界」というタイトルが皆様の心を掴んだのだとしたら、これこそまさに言葉のトリックですね。様々な素材や手法によって仕掛けられたトリックにすっかりだまされながらも、みんなだまされて



▲上田薫のスーパーリアリズム作品は、とりわけ人気がありました。

B ワークショップ「ポデゴン(鼻つき洋梨)をつくろう！」アシスタントをして

「トリック・アートの世界展」に出演されている森村泰昌《ポデゴン(鼻つき洋梨)》をまねて自分だけのポデゴンを作ってみようという壮大な企画。そのお手伝いという事で朝からドキドキでした。石膏で型を取った自分の鼻を、同じく石膏で作った洋梨に接着させ石膏を溶かして型の中に流し固めて手際よく石膏を溶かして型の中に流し固めて



▲参加者の鼻をあしらったポデゴンたち。世界に一つだけの鼻!?

鼻の型を取る事。しかし、この作業が難しい。2度3度と型を取り直す人もいます。

ことを楽しんで、そんな展覧会でした。 鈴木典子

★ 子どものアトリエ「アナモルフォーシス(ゆがみ絵)をつくろう！」アシスタントをして

た。苦勞の末に完成したポデゴンを手に取り眺める皆さんの顔は愛しい自分の分身と向かい合うようで嬉しそうでした。あの日以来、私の目には洋梨がポデゴンに見えてしまいます。 [佐々木真理子]



▲参加者が彩色した図形を円柱鏡を通すとアラ不思議、鏡の中に立方体が出現!

今回はトリック・アートのひとつ、アナモルフォーシス(ゆがみ絵)に挑戦です。彫刻家・南正邦さんが子どもたちに用意したのは2種類の特製アナモルフォーシスのシート。1枚目は各マス目に番号がついたシートで、これに自由に絵を描いて絵が描かれたマス目をマジックで塗ります。そして、2枚目は扇形に広がった番号付きのマス目シート。1枚目に塗ったマス目と同じ番号を2枚目にも塗っていくと、アナモルフォーシスがあらわになります。手のひらサイズのミニ鏡面円柱に絵をかき、ゆがんだ絵が真っ直ぐに鏡面に映って見えました。次は中二階にある鏡面の円柱に巨大立方体を映すために、全員で大きくゆがんだ立方体の型紙パーツに色を塗ります。中二階で塗り終わった立方体のピース

を床に並べていくと円柱に映る立方体は鮮やかな色で、まるで鏡の中に立方体があるかのように見えます。

D 「三代徳田八十吉展」ギャラリートークをして

「焼き物が、光を放つって!?」ガラスか宝石かと思えがうような作品がありました。

かに出現しました。アナモルフォーシスの図面作成は、複雑な計算を必要とするもので、とても難しいそうです。今回、アナモルフォーシスを出展させるプログラムを考案してくださった南さんはその奥の深さと面白さに目覚め、これからの研究テーマにされるそうです。 [翠さやか]

E 「小谷元彦展」ギャラリートークをして

次のコーナーへの移動時に黒いカーテンをあけて入る趣向の本展では、こわごわ入室するお客様の姿が印象的でした。《ターミナル・ドキュメント》の瞬時の変貌に高校生団体の悲鳴のような声が展示室に響き渡り、《ホロウ》シリーズの、すべてが空に浮かぶ白い世界への展開に「お」という声があがったときは、作者に代わって心の中で思わずガツポーズ!最後の「インフェルノ」は入り口までのご案内でしたが、それぞれに楽しめたことと思います。美しく、ドキドキチクチクする小谷作品の「幽体」をお客様と一緒に感じるのことができた、案内人冥利に尽きるギャラリートークでした。 [高木由貴子]



▲目が覚めるような鮮やかなグラデーションの徳田作品を前にギャラリートーク。



▲《ホロウ》シリーズの部屋でのギャラリートーク。作品自体の魅力もさることながら、カーテンをめくると空間が全く雰囲気の異なる空間が出現するのは楽しい体験でした。

この濃い紺色の垂たちは、青く滑らかな表面に、館内の照明が映り込んで、きらきらと輝いていました。もちろん代表作のグラデーショナルの作品、イタリアのフオンタナに刺激を受け一筋の光の線の通った作品、焼成温度で予想しない模様の子供が生まれた

[末原香里]

当館における「トリック・アートの世界展」入場者数は 26,443 人であった。歴代 5 位の人数である (1 位は 1994 年鳥山明の世界展 33,470 人)。展覧会に人が入らない昨今この数字は驚きであるが、巡回したほとんどの館で多くの観客動員があった (例えば東京・損保ジャパン美術館約 7 万人、広島・ふくやま美術館約 3 万人)。巡回総入場者数は約 30 万人に達した。

なぜ多くの方に見ていただけたのかは憶測ではないが、まずはタイトルが多くの方にアピールしたのだと思う。「トリック・アート」→「謎解きのように何か面白そう」と思っていたのだと思う。あるいは観客が不思議の世界の住人となり、その様子をカメラで撮影して楽しむことのできるリゾート地などによくある「トリック・アート・ミュージアム」の類をイメージしてこられた方もあると思う。当館も含め、広報については普段とそれほど変わったことはしていない。新聞・雑誌・テレビ・ラジオ・ウェブ・ポスター・チラシ・看板によるいつものどおりのオーソドックスな広報である。口コミにより人が人を呼んだ可能性もある。

しかし、大量動員の最大の理由はやはりタイトルではないかと思う。美術にそれほど興味ない方も「トリック・アート」の言葉に誘われて足を運んでくれたのではないだろうか。正直私はこの「トリック・アート」という言葉を展覧会のタイトルに使うことに抵抗があったし、現在でも幾分はある。なぜなら、今回の展覧会は、影を描いた高松次郎の絵画や、生卵が割れ落ちる瞬間をリアルに描いた上田薫の絵画など、「視覚」の問題に注目し、様々なアプローチでその可能性を追求した現代美術を紹介したものであるが、「視覚への徹底的なこだわり」というその 1 点のみにおいて共通しているそれらの作品を「トリック・アート」の名で括ってしまう事が、いささか強引で、デリカシーに欠けると思われたのだ。またタイトルだけでなく、内容についても「トリック・アート」を広義に捉え、多様なスタイルの作品を並べることに疑問がないわけではなかった。

「トリック・アートの世界展」はそもそも 2003 年に当館の常設展として開催された「だまされた眼-トリック・アートの世界」が母体となっている。このときは特に世間の注目も浴びず普段の常設展と同様ひっそりと会期を終えた。その後、美術館連絡協議会という全国の公立美術館が加盟する組織で開催可能な展覧会として提案したところ、単発の開催が 3 館あり、それらで多くの観客動員を記録したため、開催希望が多く集まり、そして 2009 ~ 2011 年度にツアー形式で 9 館を巡回することになったのである (当館は最後の巡回館)。

私は、2009 年度以降、この展覧会の巡回のコーディネートおよび当館での開催の担当を務めた。途中からの参加であり、すでにほぼ形が出来上がっている展覧会のタイトルを変えることはできなかった。前述したとおり、このタイトルは展覧会の内容を正確に言い表していないのではないかと作品のチョイスは妥当か? という疑問・葛藤はあったが、その一方で、いささか強引なタイトル、作品チョイスであっても「トリック」の名前に惹かれて、普段美術館に来ない方が展示室に足を運び、そこで様々な作品に出会い、現代美術の楽しさを発見してもらえたなら、この展覧会の意義はあったのではないかと考えるようになった。そして、現代美術そして美術館に親んでもらえるのなら、少々「トリック」は許されるのではないかと、いささか自分に都合がいいが、そんな風に考えるようになった。

実際、展示室を見ていると、家族で来た方や、若いカップルなど、どちらかという普段当館のお客さんとしては主流でないタイプの方たちの姿を多く見かけ、みなさん、笑ったりおしゃべりしたりと、実に楽しそうに作品に込められた視覚上の仕掛けを探り、それを味わっておられた。中には、「想像していたトリック・アートとは違う」という意見もアンケートに少なからず見られ、展覧会に不満をもった方もいたようである (このような方への対応も兼ねて、最後に錯視 (眼の錯覚) をパネルや「エムズの部屋」という体験型アトラクションで紹介するコーナーを当館オリジナルで設けたが、これだけでは物足りない方もいたのだろう)。しかし、展覧会場を見ていると、アンケートを眺めても大抵においてご来館いただいた方には楽しんでいただけたと思うので、楽観的かもしれないが、入場者数のみならず、内容面に関しても展覧会としてはまずは成功であったと考えている。とはいえ、タイトルにしろ、作品チョイスにせよ、なにかと考えさせられる展覧会ではあった。今回は、「トリック」のキーワードを手がかりにまずは美術館に足を運んでもらい、美術の楽しさに触れてもらうことを優先させた。しかし何かを優先させると何かを軽視したり、切り捨てたりしないといけないわけで、その見極め、バランスのとれ方の大切さというものを今回の展覧会を通して再認識した感がある。

(トリック・アートの世界展は 4 月 15 日 ~ 5 月 29 日開催)



▲展示風景 (佐藤正明作品)



▲アート通のお笑いタレントおかけんた氏によるトークショー。



▲森村ゴッホの顔出し看板も人気。



▲香川在住の彫刻家・南正邦氏によるアナモルフォーシス作品。バナナ型が円柱ミラーを通して見ると球形に見える驚異的な作品。南氏によると立体アナモルフォーシスは世界初とのこと。当館だけの追加出品としては他に香川出身の陶芸家・亀井洋一郎氏に興味深い 2 作品を出品していただき、自作と堀内正和や八木一夫らの作品との展示をキュレーションしていただいた。



▲中 2 階の休憩スペースで展示された中学生が制作したトリック・アート作品。ピースの表裏で異なる絵柄が描かれた巨大パスルや、石を本物そっくりに成形、彩色した作品など力作が並ぶ。



▲歯ブラシを使ったお絵かきに挑戦!

「高松しび検定」に挑戦してもらいました。高松市美術館に関するまめ知識や「トリビア」

8 月 6 日は開館記念日。8 月第 1 土曜日を美術館の日として 3 年目、3 回目のイベントが行われ、「ふらっとアート」と称して、ふらっと立ち寄った人に美術館を楽しんでもらえるように様々なプログラムを実施。子ども向けにはワークシートのクイズを解きながら美術館内の作品を鑑賞して回る「美術館探検」。また不思議なコマや独特の風合いをもつ「もみ紙」などを作る体験コーナーでは親子が協力しあって作品づくりを楽しみました。大人の方には「高松しび検定」に挑戦してもらいました。高松市美術館に関するまめ知識や「トリビア」

★「美術館の日」ふらっとアート アシスタントをして

「インコの大好物!」と書かれたバケージから出てきたものは乾燥したイカの甲。今回はイカの甲を鑄型にしたスズ製のイカしたアクセサリ作りを挑戦しました。半分に分かれた甲の片方にデザインを下書きして、へらで下書きを彫って残りの半分にぴったりとくっつけたら準備完了。造形作家・小沼秀齊さんにバーナーでスズを溶かして、鑄型であるイカの甲へ熱々のスズを流し込んでもらいます。緊張気味だった子どもたちはスズが溶ける様子に興味津々。アクセサリの仕上げを施してくれている間

を検定にしたものです。これがなかなか難しいにも関わらず、高得点の「上級者」も 2 人いらっしゃいました。ふだん美術館に縁遠い方にもお越しいただけるよう、もっと美術館の日を PR せねばと思いましたが、暑い暑い夏の 1 日でした。 [田中スリ子]

★子どものアトリエ「イカの甲からイカしたアクセサリを作ろう!」アシスタントをして

「学生ボランティア cimi」とは今年結成された高校生と大学生からなる組織で、小谷元彦展から活動を始めました。小谷展では事前に担当学芸員からレクチャーを聞いたたり、内覧会で小谷さん本人と歓談するなどして小谷芸術への理解を深め、会期中の火

伊イ、かわいいアクセサリが完成してみんな大満足でした。 [翠さやか]



▲イカの甲にスズを流し込み、取り出そうとしているところ。部屋には香ばしいイカ焼きの香りが...

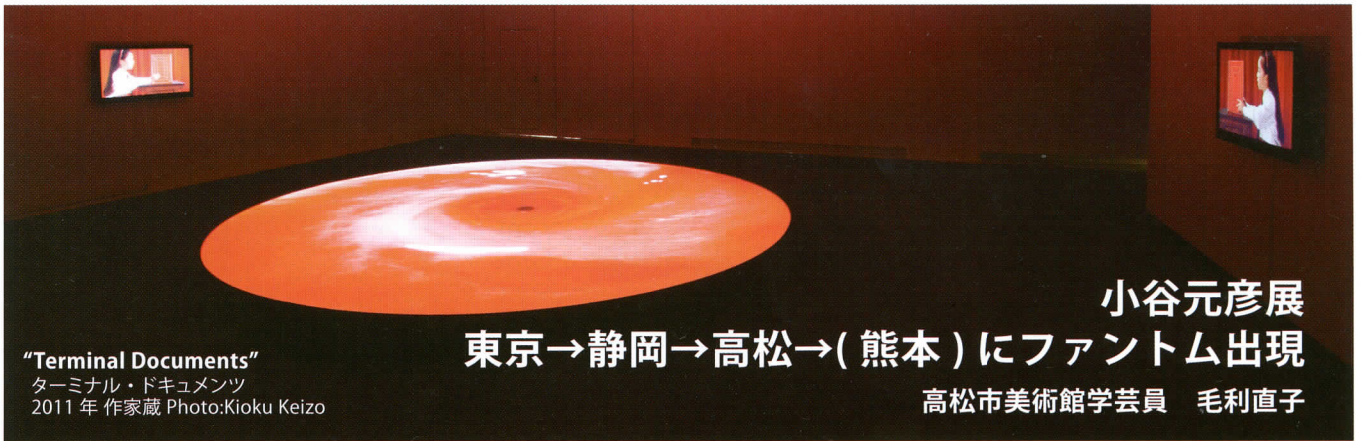


▲番外編アートで遊ぼう!で「もみ紙」を子供に教える cimi メンバー。

ご期待ください。 [牧野裕二]

「土には映像作品『インフェルノ』の鑑賞案内を務めました。そして、イベントアシスタントとして、8 月 6 日「美術館の日」と 8 月 19・20 日の「番外編アートで遊ぼう!」では子どもたちへの簡単な作品制作の指導をさせていただきました。美術専攻の生徒も多く、美術館側で用意した作品作りのプログラムに対して自分なりのアレンジを加えつつ、楽しみながら一杯取り組んでくれました。ちなみに、自分たちで話し合っって決めた cimi (シミー) の名は、cimi の若者版ということからその名前をベースに、可愛らしい響きを加えたこととです (名付け親談)。産声を上げたばかりの cimi の今後にご期待ください。

もみんな小沼さんの作業を夢中で眺めていました。イカの甲のしわを醸して自分だけのカッコ



“Terminal Documents”
ターミナル・ドキュメント
2011年 作家蔵 Photo:Kioku Keizo

小谷元彦展 東京→静岡→高松→(熊本)にファントム出現

高松市美術館学芸員 毛利直子

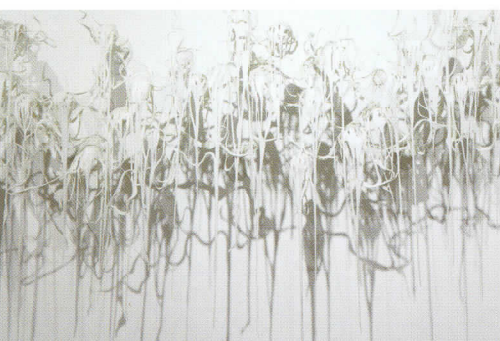
今

年2月、森美術館（六本木、東京）で「小谷元彦―幽体の知覚」を見たとき、正直、震

えた。作品の佇いにこちらの緊張感是最後まで途切れることはなく、部屋を進むごとに思わぬ展開が待っていた。真っ白い《Hollow》の森、一直線に並ぶ《SP4》シリーズのほの暗い最奥で背を向け立つ《See all》、漆黒の部屋に浮かび上がる《New Born》の得体の知れない生命体の白さ、東京の夜景をバックに弾け散る血のシャボン玉、そして極めつけは8面体の体験型映像作品《Inferno》など。ゆうに30分は待たその《Inferno》、気がつくとき長い列にふたたび並び、翌日もまた「小谷展」を訪れていた。実際、高松会場にもリピーターは多い。幾度と繰り返し見たくなるヴィジョン、それらは小谷さんが言う「いくつものレイヤー構造を持った」不可解なラピンスでありながら、どこかデジャヴ感をとまなうもので、夢見と覚醒を往還するような感覚なのだ。

5月末、前会場の静岡県立美術館では、重厚なエントランスホールに設置された《see all》に心は鷲掴みされ、ロダン館の《地獄の門》と対峙する騎馬像《SP4:The Specter》の挑みのドラマが絶妙に思われた。だが、最も驚きを以って魅了されたのは、静岡会場から出品された新作《Terminal Documents》であった。これは高松市美術館では独立した部屋で展示することになった。ここでは《Terminal Documents》（以下《TD》）について述べたい。約10メートル四方の部屋中央に置かれた直径4.5メートルの円形ブルー一杯に水が張られた。天井のプロジェクトから水面に映し出された、内臓髪を思わせる赤い液体が中心に向かってスクリーニングの映像が、突然「オー」という音と共に、一瞬にしてミルキーな白の映像に変わるというものだ。そして、続く白も音を伴って跡形もなく消えると、赤が現れ、それを繰り返す。両壁面に架けられた42インチのモニタには、赤い壁のカーテンの前で、分厚い赤い書物を読む少女の姿がゆるやかに右に流れていく。少女が声にするテキストはホフマンの『砂男』だというのが、その音声は逆再生されており、今では誰も発語できない、原初的な異境の音節の連なりを聞く思いがする。少女の映像は《赤の書》とタイトルされており、G・G・ユングの私的な日記として書き綴られた伝説の書物『赤の書』を彷彿させるものであり、幾層ものレイヤーがめぐらされた《D》、その迷路の扉はどこまでも続くようでもある。

さて、小谷さんは《D》について「ある小説を読んでいて、ターミナル・ドキュメント（末期記録）という一言が気になった」と話しはじめた。確かに、亡くなる前に見えた光景という意のあるこの語への傾倒は絶ちがたい。誰もが避けられない、「その時」に向かって生きていくからだろう。続けて、「具象的・形状的な概念ではなく、原始的な彫刻がある儀式性、呪術性と深く関係していたように、消えた人、亡くなった人を呼び起こし、透明なる存在（彫刻的な魂の入れ物）を知覚させる場所を作る事を目的とした。」とも語った。大きな水鏡は、私たちが地下の世界へ誘う入り口のようなものだ。その地下世界のイメージは時代を経て、死者の世界（黄泉）から宗教による地獄へと変わったが、共に影が支配する世界である。すでに《Inferno》（この語はダ



“Hollow: Pianist/Rondo” ホロウ：ピアニスト／ Rond
2009年 太田正樹氏蔵 Photo:Kioku Keizo

ンテの『神曲』の「地獄篇」という意味）で、「絶対的他者」との出会いを観客にもたらしたが、今度もまた私たちは「絶対的他者」と交感することとなる。《D》の吸い込み口の先には、数秒ごとに本物の水滴が落ちており、水面には波紋が生まれる。実際の波紋は虚像である映像の水流が包みこみ、もはや区別がつかなくなる。赤はより濃い赤に呑み込まれ、また瞬時に白に覆われる、あるいは反対に白が赤へと生まれ変わる円環の様に、言葉もなく憑かれたように円形ブルーを囲む観客は、ひとりひとり無意識下の階段を降りている風にも見えた。

実存と虚像の関係は、小谷作品の重要なキーとなっており、特に高松での《Pianist/Rondo》では影こそが実体化し、あたかも息をしているようにも見えた。この影や「2」という概念や音の問題など、彼の作品の考察を深める扉は多方面に開かれているのだが、その先には別の扉が待ち受けていることだろう。

ご案内

美術館ボランティア「civi (シヴィ)」によるギャラリートークは、特別展会期中の毎日曜日および祝日の午前11時～、午後2時～の1日2回、2階展示室にて行います。

私たちと鑑賞をご一緒しませんか？

発行：高松市美術館 編集：civi & 牧野裕二（高松市美術館）
デザイン：福田千恵（高松市美術館）

高松市 〒760-0027 香川県高松市紺屋町10-4
美術館 Tel: 087-823-1711 Fax: 087-851-7250

編集後記

- 長月と呼ばれる9月。夜が長くなり穏やかな季節が確実に近づいた事を告げています。秋は私の大好きな季節。今年は読書とスイーツを楽しみます。 [佐々木真理子]
- 高松市美術館で9月4日まで開催された小谷元彦展。なんだか、一人で古い寺院巡りをしているような気分になる不思議な展覧会でした。 [鈴木典子]
- この前生まれた三人目も、はや1歳。歩き、走り、上り、落ち…。目がはなせません。生活を子どもと一緒に楽しむのが、モットーなので、ハラハラもありますが、美術館にも連れて行きたいです。 [末原香里]
- 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館にて首藤康之 KANNON 観てきました。異空間に引き込まれるようでした。 [田中えり子]
- 8月中旬、評判の高い高知の「よさこい祭り」を栈敷席で見ました。一糸乱れぬ踊り手の集合美にノールコールビール片手に酔い痴れたひと時でした。 [高木由貴子]
- 9月から始まる六甲ミーツ・アート芸術散歩 2011 に、10月から

- 始まる神戸ビエンナーレ 2011。どんな作品と出会うのか芸術の秋の訪れが待ち遠しいです。 [遠山直子]
- この数ヶ月、いろんな現場体験を通して美術にたいする視野がとても広がりました。美術の良さを伝えるのは難しいですが、その分だけやりがいがあります。ワークショップのお手伝いも毎回楽しみです。これから始まる絵本展もさらに楽しみです。 [高松市美術館 インターン 翠さやか]
- 今年からインターンと学生ボランティア cimi の皆さんが美術館の仲間に加わりました。インターンは香川大学院生の翠さんがお越しくださり、展覧会の準備やワークショップのアシスタントなどを熱心に取り組んでくださり、今や美術館活動に欠かせない存在となっています。cimi については本文で述べましたが、あるメンバーが提案した忘れられない幻のネーミング案について一言。それは「若気のいたりん」というもので、魅力的ながら実際の運用への懸念もあり却下となりました。しかしこうした突き抜けた感性の持ち主がメンバーにいることを頼もしく思います。[高松市美術館学芸員 牧野裕二]